

が、詳にし得なかった。

(注一) 昭和四十八年十一月。

(注二) 『佛教大學人文學論集』昭和四十九年九月。

(注三) 『人文』昭和六十二年六月。

(注四) 注二の論文から。以下同じ。

(注五) 拙稿「南都本『平家物語』第九、及び、延慶本『平家物語』
第四 をめぐって(二)」『人文』昭和六十年六月。

本稿は昭和六十二年度九州大学国語国文学会で口頭発表したものに
調査を補って成ったものである。

(昭和六十二年九月八日受理)

翌日、義仲が六条河原に首を掛け並べたと云う文は延慶本・長門本に近いが、六百三十余も首があったと云うのは両足院本周辺に拠ったのであろう。これに続く「よるこひの時」の所は南都本に拠つてゐる。修範が出家して法皇を見舞う条は非当道系本の表現・内容である（延慶本・長門本には長い問答が付いてゐる）。一方、義仲が何になろうかと可笑く迷つてゐる所は、廐の別当に成る処を分けて後に記すのが小野文庫本の特徴だが、本文は諸本と大同小異で、格別の特徴はない。二十八日に義仲が四十九人を解官した条は南都本・延慶本・長門本の非当道系本に、両足院本周辺の当道系本が混じられてゐると見られる。大江公朝、頼朝に注進の条、小野文庫本は範頼・義経を介したことを省いた為に、藤内左衛門時成が浮いてしまつてゐる。本文は当道系本の百二十句本・屋代本の一本と竹柏園本を合わせれば依拠部分は殆んど覆われる。

義仲が平家を語らおうとした所では、法住寺合戦を聞いて、平家が面白がる処に非当道系本がとりいれられてゐる。それに続けて、義仲が左馬頭になったことが記され、多くの庄園を横領したことに続いて行く。これも非当道系本の筆致である。

松殿基房のとりなしで多くの貴族が許された条は延慶本・長門本・南都本と殆んど同文である。法皇の解放は当道系本も非当道系本も殆んど変わらない。師家関白の条、師家の齢を十三とするのは源平盛衰記であり、師家の官名を関白とするのは両足院本・八坂本である。これも、そのあたりの合成であらうか。

卷末記事は特にどれと関係が深いとも言いがたい。

三

以上の調査から、小野文庫本のこの巻が所謂編著本であることは確

かである。編著者は関係のある他の箇所となるだけ整合性をもたせようとしたり、不穏当な表現はないか気を配つたり、表現にかなりこだわつてゐるようである。例えば、延慶本・長門本はこの本執筆の主要な材料と考えられるのだが、かなりに手を入れながら写してゐると見られる。編著者が独自の姿勢でこの巻を作成してゐるので、その材料の様子はどうもはつきりしないのであるが、既述のことから、大体の印象を述べて、纏めとしたい。延慶本・長門本については、各本の長文の独自記事は全く採り上げられず、共通記事が全てと言って宜い。延慶本は法住寺合戦で、義仲方の搦手を今井四郎としたり、法皇方で討ち死にした武将を赤塚判官代としたりすることなどで小野文庫本と異なり、長門本は太宰府落ちに加筆がある外、全体に脱落が多く、延慶本・長門本のどちらか一方だけが材料であつたとは判断出来ない。南都本は清経入水以後にその関係が顕著になるが、兄弟本のようなものから、略述の傾向をもちながら、表現をそのまま取り込んでゐると見られる。源平盛衰記は、源氏受領・平家解官等に一致が見られるが、全体に文体差が大きく、一致の見られるのは延慶本・長門本・南都本との共通部分に於いてである。源平闘諍録も宇佐行幸など共通部分で小野文庫本により近い表現が散見する程度である。当道系本は、屋代本・小城本・百二十句本の類、平松家本・竹柏園本・鎌倉本の類・東寺執行本・中院本の類、覚一本、両足院本、八坂本はそれぞれで一類と、この場合は見えた。両足院本は表記での近さが感じられて、書承の関係のようなものがあるのではないかと思われた（文章の異なりも大きいのだが）。屋代本類と竹柏園本・鎌倉本類とは混然しつつ、小野文庫本に一致すると云う風であつた。覚一本は二十日四の宮即位から安楽寺詣でに於いて小野文庫本に近い等、意外に群が目についた。当道系本との一致には平曲を聞いたのが耳に残つてゐたと云うのもあつたかも知れない（文体差が大きいのに、細部の一致が散見するので）

平松家本・鎌倉本。後半の合戦部、小野文庫本の平家方の陣立て、行家が平家に突っ込んで、敗北するまでの合戦描写は延慶本・長門本・源平盛衰記の表現が混じり合ったものである（「しはらくさ、へてゆんての木かけへなたれにけり」などからすれば微差ながら延慶本に最も近いと言えようか。高橋氏は「長門本に類する」とされてゐるが）。右のように、小野文庫本の室山合戦は非当道系本の表現をとりこんで、当道系本に比べれば著しく長文になってゐる。

室山合戦の後、遡って義仲軍入京後の彼等の狼藉振りを描いた所は、高橋氏に「長門本に類する語」と云う指摘があるが、「たうたうをこほちやき佛經所を、かす」の表現等、南都本との一致が目につき、それに「はしを立てしよくせんとする物を」のように源平盛衰記の表現が混ざつてゐるという風である。猶、白旗を立てた所を道とするのは屋代本・小城本・百二十句本・東寺執行本・中院本・八坂本と云つた当道系本であり、それらのうちのどれかが参考にされた筈である。

平知康が使者として遣されるが、義仲の言葉に腹を立て、義仲追討を企てる、しかし、一溜りもなく打ち破られて、知康が姿を晦ます所まで、引き続いて「人のいみやうをむかふさまに申事かあまつさへうたる、かはらる、かなとまで申て候つる」「折にこそよれきたなきしにすな」等、南都本と一致する表現が多く目に付く。南都本以外に非当道系本が少くとももう一本参照されてゐる筈であるが、どの本か性格がはっきりしない。当道系本では義仲軍を三千余騎とする点で屋代本・小城本・百二十句本が関係をもつてゐるよう。又、表現の上で、誤写・脱字（省略しながら本文を作つて行つた傾向が強そう）が多いが、その中で、「御使をあさむき」「よむかたは」は両足院本の「御使ヲ嗽テ」「讀ム方ニハ」と書承の上の近さを感じさせられた。高橋氏は知康の言葉戦いを例に引いて「十二巻本の詞章があくまで主」と述べられたが、筆者は非当道系本方の文章を省略して、量的に当道系本方

に近付けたものと云う面が強いのではないかと思うのである。

知康逐電の後に記される法皇方のみじめな敗北の場面の一つ一つを見て通ることにする。知康逐電後の法皇方の混乱を描いた所は当道系本の表現（屋代本等）が使われてゐる。八条口の山法師軍が楯勢に破られた所は非当道系本の短い文章を独立させた（知康の描写から）と云う風である。摂津国源氏の滑稽を描いた所は南都本を中心にして、他の非当道系本も参照してゐる様に見える。この、「西へにくれは北南よりさし合てうつ西東よりあますなますなとて」には「南へ逃レハ」（南都本）の脱字があり、「院宣の下けるは在地の者のおちゆかんする者をはみなうちころせ」の文脈は危い。良い武者の例として源光長父子の討ち死にを描いた所も南都本に拠つてゐるよう。これに続けて村上判官一族を加えた所は延慶本は「赤塚」とするので、長門本に拠つたと云うことになる。明雲座主と八条の宮の横死は南都本を中心にして、他の非当道系本も参照して描いてゐる。法皇囚われは南都本に延慶本・長門本が混ぜられた様な内容・表現である。源雅賢囚われ、信行・為清・親業殺されも非当道系本の筆致である。源頼輔の可笑さは当道系本と非当道系本の表現が混ぜられてゐるが、正久が坊を尋ねて下る所は当道系本の筆致である。源光仲・仲兼落ち延びは南都本を中心に、「さきにしにて見えん」等、部分的に延慶本・長門本の表現で補つたもののようである。但し、光仲については、「上の山にこもりぬ」とあつた彼が、宇治に向けて「河内守藏人大夫は」と同道してゐるのは変だし、更に摂政が「あれは仲兼か」と光仲を挙げないのは一層おかしい。おそらく当道系本を不用意に混じえてしまつたのであろうが、それが何本かははっきりしない。主上保護では小野文庫本独自の表現が目につく。主上保護は南都本でも、延慶本・長門本でも法皇囚われの後にあるのだが、それがここに置かれたのは、或いは小野文庫本の編著作業に関るのかもしれない。

容と言える。幸広の覚悟の戦死は南都本・源平闘諍録の描く処である。猶、小野文庫本は「平家には門わきの中大納言しそくゑちせん（ママ）の三位のとのかみふし三人大将として千よそうの舟にとりのりてうるふ十月一日ひつ中国水嶋かわたりにこきむかふ」平家千よそうにてをしよせたり」と繰り返して、平家方が積極的に逆襲に出たことを強調する。後者の短い「平家千そうにて」の文は平松家本・竹柏園本の表現であり、ここにも編著作業の跡が指摘出来るのだが、前の文にあるような門脇一門の水軍として描くものは他にない。「源氏の舟は五百よそううかめたりけるかしほ引て舟ひあかりたりけり」も、舟数は平松家本・竹柏園本（当道系本）に一致するが、他にこのような内容を伝える本はない。小野文庫本はどこからこのような伝承・内容を得たのであろうか。

水島での敗戦を聞いた義仲は自ら西征に赴こうとするが、妹尾兼康に欺かれ、苦汁を飲まされた。妹尾最期について高橋氏は「記事の順序が一方流本と異なる所がある」と指摘されてゐるだけである。小野文庫本の「記事の順序」は

- 1 義仲、樋口兼光を都に残して、自ら西下しようとする。
- 2 兼康、倉満三郎に勧めて、先発隊として妹尾の庄へ下ることにする。
- 3 嫡子宗康、兼康を迎えに来て、共に下る。
- 4 兼康、備前、備中に蹶起を触れ、三石の宿で三郎主従を欺き殺す。
- 5 兼康を蘇武・李陵に準える。
- 6 兼康、行家の代官を夜討ちにする。
- 7 兼康、更に合力を募って、「ふくりん寺なはてき、のせまり」に楯籠る。

8 行家の代官、義仲に兼康の反乱を告げる。

9 「ふくりん寺なはて」の攻防。

10 備中国板倉川の攻防。

11 兼康、倉満太郎を討ち、恨みを晴らす。
12 兼康父子の最期。

のとおりである。倉満三郎主従を殺す所（4）までは覚一本の表現を中心に、部分的に両足院本・八坂本の表現が混ざったような表現内容である（但し、兼光を留守居にすること等、独自の表現も多い）。が、この間でも、順序では高橋氏の指摘のとおり兼康を蘇武・李陵に準える文章のある位置が異なる（覚一本では2の前にあり、兼康の意図を明かして、享受者に見方を指示する）。行家の代官を夜討ちにする所（6）から後は南都本を縮めたような表現である。勿論、南都本で兼康が「小竹ガ迫り」に楯籠る所に記されてゐた小太郎の「尾嶋」からの合流は省かれてゐる。猶、小野文庫本の「をむろの藤三郎」は南都本の「小宝ノ太郎同三郎」と関係があると見られ、南都本の兄弟本を祖本（該当部は仮名表記だったかも知れない）にしてゐた可能性がある。又、「千たひきらんと申候し物を」「今井四郎まつ三千よきにす、みけり」の表現は覚一本を採用したのであろう。更に、小野文庫本には、倉満三郎を欺き殺す前（4）と「ふくりん寺なはて」に楯籠る前（7）に兼康の合力を求める触れを記す。よく似た文で重複の感じが強いが、前の方（4）は八坂本に近く、後の方（7）は南都本に近いと見られる。このように小野文庫本の妹尾最期は全体として南都本と覚一本・八坂本等との混態と云う現象を呈してゐる。

妹尾最期の後に室山合戦が続くのは諸本一致してゐる。室山合戦でも引き続き「なんかいとうにか、りて西國へけかうす木そはせんやうたうより」「平家水嶋のいくさよりはしめてやいろはま三石おほくのいくさにうちかちてこそ色なをりけれ中中国のせい共したかひてければ」など南都本の表現との一致が指摘される。ところが、当道系本に近いものは平家の軍勢を「二万よき」とすることと「ゐんのきんしゆして」と云う表現ぐらいで、竹柏園本に最も近い（これに次ぐのが

庫本は再び屋島に転じる。僅かに三つの文から成る所であるが、成良の音頭で内裏や御所が建てられたという最初の文は当道系本の表現である。しかし、建築の功で成良が阿波守に任じられたとする次の文や「人々なりよしかめいにたかはしとそふるまひ給ける」と云う最後の文の内容は南都本にしかない。ここについて高橋氏は「他本になく」と述べられたが、筆者は右のように当道系本と南都本との合成本文と見る（配列の上から見ると、安貞報告から成良の平家奉公へとなっている本は外に無いようである。しかし、成良の平家奉公、勢威から小野文庫本のように都での義仲の振る舞いに転じると云う展開を有つものには外に源平闘諍録がある）。

都での義仲の振る舞いの前半部、義仲と猫間中納言の対面についても高橋氏に「一方流本に近く」と云う指摘があるが、筆者の調べた処ではつきりしているのは南都本との関係である。この「木そよし仲都へのほり平家をはをひおしたりけれ共あくきやうなをまさりて都のらうせきしまらすてんせい木そは心もかうにゆみとりてもよかりけり」「たいめんの儀しきまことにふさたなりさいせんのことはいはいはくねの井や候」「か、るあらもの、前にてくはても」と云った表現は南都本だけにしか類似のものを見付け出すことは出来ない（一部両足院本とも共通する所もあるが）。南都本にない表現もいくらか混ざっている。南都本以外の本も参照されている筈であるが、それほど本と特定出来ない。

その後半部、義仲の初出仕を描いた所では「つかはれけれ共しうのかたきなれは目さましく思て心にも入さりけり牛はきこゆる小あめうし也」等、延慶本・長門本に一致する表現が目につく。延慶本・長門本のここについて、筆者は「牛童についての説明が重複しているのではないかと思われる。その前の方は、表現までほぼ源平盛衰記に一致している。それに対して、牛童の名前を記したりする後の方は、当道

系本的で、平松家本に近い。」と指摘して置いたが、延慶本・長門本に見られる重複で「後の方」は小野文庫本に一致すると訂正しなければならなくなった（平松家本の比ではない）。同じような問題といえるかどうか、牛車を飛ばした次郎丸は供の者に理由を問われる。その理由を延慶本・長門本では「御車牛ノ鼻ノ強テ留カネテ候其上シハシヤレ／＼ト仰候へハコソ仕テ候へ」（延慶本）と述べることになってゐる。東寺執行本・中院本・両足院本を除く大方の当道系本は「牛ノ鼻ノ強テ」と云うことだけをあげる。「やれ牛こていと承候つるほとに」と云うことだけを理由としてゐるのは管見では小野文庫本だけである。

延慶本・長門本・源平盛衰記・東寺執行本等のここを混合本文と言えぬのか自信はないが、義仲の言葉だけを理由として挙げてゐると云う点は興味深い。牛飼いの名前の「次郎丸」、彼を咎める人物を当道系本のように今井兼平としないこと、言つただけに止めて實際後から降りたかどうかを記さないこと等、この初出仕の条では先述のように延慶本・長門本の表現・内容が目につくのであるが、当道系本のそれもない訳ではない。しかし、当道系本については覚一本・東寺執行本・百二十句本等の表現が部分的に見られるだけなので、明確なことは言えそうにない（高橋氏の「一方流本に近く」は初出仕に対してかと思われるが、それにしても微かである）。

都での義仲の失態に続いて、義仲軍の最初の敗北が描かれる。水島の合戦については高橋氏に「略一方流本に類する」と云う指摘があり、冒頭から義仲軍が西下する所まで等、当道系本の表現が目につく。しかし、当道系本の中では微差ながら、覚一本よりも平松家本・竹柏園本の方が近いようであり、外に東寺執行本に近い表現も加えられている。又、足利義清と海野幸広の戦死の關係は源平闘諍録・南都本に近いが、義清が「やすからぬ事なりとて」「す、みた、かひける」上での事故で水死したとするのは平松家本・竹柏園本（当道系本）方の内

形見の髪が「思ヲマス便り」となったと描いている点では南都本に近い。しかし、清経が「朝夕のいくさ出立」の中で一人取り残され（傷心を慰められることもなく）、それが機縁となつて現世を捨て、「あかてわかれしなからひを見もし見えません」と北の方への愛を貫くべく来世を求めると云うのは全く小野文庫本の独自の世界である。

清経入水の後、平家は阿波民部成良に迎えられて屋島に落ち着く。この展開はこの前に引き続いて延慶本・長門本に拠つたのか、或いは覚一本に拠つたのか、ともかく、大部分の本がこのような展開になっているのである。内容・表現の上から見ると、道資を「きやうふ大夫」とし、彼が平家に差し出した舟を「百よそう」とする点、やここに「なみの上の行宮なれば」以下の対句たくさんの美文を置くのは覚一本に拠つてゐると思われる（小野文庫本が何故「なみの上の」の前の句「龍頭鷁首を海中にうかべ」を省いたのかはよくわからないが、都での生活に引き替えてと云う文を連ねる後半に合わせて、編著者が意識的に省いたのかも識れない）。小野文庫本は覚一本に比べると、成良の言動が詳しいが、そのうち「四方の遠見を、きたりけるか一方の遠見申けるはうみのおもてにさ、の葉をちらしたるやうに舟のうかひ候と申ければ」等は南都本に最も近く（高橋氏は「長門本にある」とされているが、南都本と関係があるのではないかと思われる。しかし、「なりよし」と読める「成良」と云う表記を有つのは延慶本であり、「御心さし思まいらせんともからはいつくにわたらせおはします共参候はんすらん」と云う文も延慶本（長門本も）に近い表現を見出せるので、延慶本（長門本）に拠つてゐることも間違いない。猶、小野文庫本は非当道系本に見られる「すみなれし」の歌を、ここに、平教盛の歌として記してゐる。

屋島入りの後に源頼朝の征夷將軍拜任を記するのは当道系本の文の流れである。当道系本方といえば「十月四日くはんとうへ下着す兵衛佐

の給ひけるは」と、中原安貞の動きと共に同時間的に鎌倉の様子を描いて行くのも当道系本方の筆致である。非当道系本はこれに對して「廿七日上洛シテ院御所ノ御壺ニ参テ関東ノ有様ヲ委ク申ケリ兵衛佐被申候シハ」と安貞の報告談、時間を遡つての様子として描いている（こちらが譚の提供者を明白に示してゐる）。当道系本では、「外侍にはいゑの子らうとうかたをならへ」「上にはかうらいへりのた、みをしきてみすたかくまきあけさせ兵衛佐殿出むかひ給ふ」等の表現との近似から両足院本との関係が、「ぬりこめとうのゆみにいか物つくりの太刀はいて」等の表現との近似から八坂本との関係が、それぞれ考えられる。高橋氏は一方流本・八坂流本の混合本文と考えられたが、筆者は右のようにもつと本を絞れるのではないかと見てゐる。非当道系本では高橋氏が長門本を挙げて居られるが、延慶本・長門本に近い所「せんしのふくろをはさうしきおとこにかけさせて出きたり」等は源平闘諍録にも近く、表現・配列の上から見ると寧ろ源平闘諍録寄りかと云う気がする。又「くはいらうありつくり道十よちやう見下ててうばうことにすぐれたり」「比企藤四郎よしきた」は源平盛衰記に一致する表現が見られるので、源平盛衰記との関係も考えなければならぬであろう。更に表現の上では「御使はちやうくはんとて聞えし」「頼朝ちよつかんをかうふりたりし身なれ共」「せんしふくろをらんばこに入てたてまつる」「や、久ありてらんはこを返されたりひらいて見れはしやきん百両入られたり」「きくはいにおほえ候なりついたうせよといふゐんせんを」等、南都本に（だけ）一致する表現も少くない。源平闘諍録・源平盛衰記・南都本は何らかの関係で繋がつてゐると見られるが、それにしてもこの両系に跨がつての五種類（或いはそれ以上）の本文との近似を成立論としてどう考えれば宜いのか、戸惑わざるを得ない。

安貞が御所に参上して鎌倉での次第を報告したと云う所から小野文

の発した命であつた。この展開も覚一本の通りである。しかし、その内容は延慶本・長門本に近く、当道系本よりも「すてにさいくはをまねくところなり」「ちよつかんをかへり見て身をまつたくせんと思は、」と威嚇的になつてゐる。

追出しを一人で成し遂げた男、それが緒方惟義である。彼の恐ろしさを説明するために、五代の祖「あか、り大太」の話がどの本でもここに記されてゐる。小野文庫本のそれについては高橋氏に「一方流本に類する」と云う指摘があるが、確かに前半の男が通うようになるまでが短い（固有名詞が殆んどない）等、当道系本である。しかし、大蛇が「一ごのあひたわれまもらんするそ」と言う所などは非当道系本に依つてゐる筈である。又、当道系本では、確かに覚一本などに近いようであるが、女が針を抜くことは覚一本になく、これは源平盛衰記・中院本・両足院本・八坂本のうちに拠つてゐよう。非当道系本に比べると固有名詞がないと記したが、小野文庫本は、覚一本に比べても狩衣の色、祖母岳の位置や大蛇の長さを記さない等、具体性に乏しい。

惟義謀叛に驚いた平家は旧主、小松三兄弟を説得に当たらせるが、失敗に終わる。小松三兄弟とするのは延慶本・長門本・南都本（八坂本も）であり、「此両月はすこし人々あんとしていか、してか源氏ほろほすへきと議ぢやうよりほかは他事なかりつるにこはいかにしつる事やらんととうさいをうしなひ給へり」「をのくめんほくなくて帰られにけり」もこれら非当道系の本を参照してゐると見られる。一方、小松家の君達に説得させると云う案を出した人物を時忠とし、「大事の中の小事」という諺に触れる（延慶本・長門本も）のは平松家本・竹柏園本・鎌倉本・覚一本と云つた当道系本である。

追い様に惟村が使者として遣つて来るが、時忠が大弁論を展開する。ここは惟村の言葉にも時忠の言葉にも非当道系本方のものが大幅に取

り入れられてゐる。それらを列挙すると、「さうてんの君」「十ぜんていわうましませはほうこうをつかまつるへく候へ共」「太上天皇の御孫高倉院のきさきはらの第一のわうし伊勢大神宮も入かはらせ給らんみもすそ川のなかれ久しくかたしけなくも神代よりつははれるしんしほうけんないし所をたいし給へり」「九国のもの共いかてたやすく君をかたふけたてまつるへきむかし平將軍さたまりさうまの小次郎まさかとをついたうせしよりこのかた國家のかためとなしたてまつりて代をへたり」「のふよりの卿をちうりくして」と云つたことになる。

惟村の報告を受けた惟義は白杵惟高と共に太宰府を攻める。高野本庄で敗れた平家は太宰府を落ち、山賀城に入る。ここでは小野文庫本独自の内容が目につく。太宰府を攻めた軍勢を惟高・惟義の連合軍としてゐること、種直の軍兵二十余騎を平家軍の中心であつたとしてゐること、矢合を二二日とすること、いずれも他本には見られない。高橋氏は「太宰府落事も略一方流本に近く、一部長門本に類する所がある」とされるが、「是はどうせんの道なれば」の表現からすると、当道系本では寧ろ、平松家本・竹柏園本・両足院本との関りが強そうである。非当道系本とは、「され共せんごうのいたすところなれはこんしやうのかんおうなきに、たり」の文からすると長門本との関係が確認される（延慶本は「前尊ノ果ス都ナレハ」）が、山賀入城と共に種直が離反するとしてゐるのは源平闘諍録・源平盛衰記・南都本と云つた諸本であり、複雑な関り方も想像される。

「思きや」の文章から山賀落ちへと続くのは延慶本・長門本の配列だが、延慶本・長門本では「思きや」の前は十三夜の月見、詠歌となつて居り、一方、山賀落ちから柳の浦へ、そして左中将清経入水へと至る所は当道系本の内容となつてゐて、編著者の独自の判断でこのあたりは纏められたと見る外ない。編著者の独自のものと云えば清経と北の方のこともある。小野文庫本のそれは北の方の素姓、年齢を記し、

の文など、部分的に南都本・長門本に一致する所もある。猶、覚一本との関係だが、

（覚）とみ に事ゆきがたうやあらんずらんと人々さ、やきあへり
（小）と見るに 行かたくやあらんすらんと世には 申ける
（鎌）利見 二事 難行 乎有 スラムト人々私 言相へり

のような例を見ると、小野文庫本は覚一本の祖本の位置には立ち得ないと考えられる。

源氏受領の事に就いては、高橋氏に「一方流・八坂流本にはなく、これも長門本（延慶本）に近い語である」と云う指摘があるが、これはいに疑問である。「あさ日の將軍になされにけり」と云う記事や義仲・行家の国替えが行われた日を記さないこと等から小野文庫本が当道系本、特に覚一本を参照してゐることは間違いないと考えられる。

勿論、その一方で小野文庫本は非当道系本をも参照して居り、高橋氏が指摘されてゐる延慶本と源平盛衰記・南都本等がその参照された本の想定内にある。三本は優劣付け難い近さをもつてゐるのであるが、「あふみのかみ」の一致から（延慶本・長門本・南都本は「遠江守」とする）源平盛衰記が参照されたのではないかと考えられる。

十六日平家百八十人が解官されたことを記す条も、日付け等は覚一本、人数等は源平盛衰記が参照されてゐると見られる。

十七日平家太宰府入りは当道系本の表現であり、同じく覚一本によつてゐると見られる。

平家安楽寺詣でも同じく覚一本の筆致であるが、「みな人袖をそしほりける」等、部分的に南都本の表現を混じてゐる。

安楽寺詣でに続けて、小野文庫本は平家の人々の間で四の宮即位についての感想、意見がたたかわされたことを記す。覚一本ではここに

先ず二十日の即位を記し、位争い、そしてこの論評へと云うことになつてゐるが、小野文庫本の配列はその変型と言えようか。しかし、その内容は非当道系本方であり、大友皇子の牽制の様子はもっと詳しい。諸本、時忠など具体的な人名をあげるのだが、小野文庫本は完全に伏せてしまつてゐる。それは、諸本で人名に出入りがあるからだろうか、北陸の宮の即位もありうると云う内容だったからであろうか。

平家太宰府入り後、平氏関係の記事が続いてゐたが、小野文庫本は、四の宮即位に就いての平家の論評の後に、伊勢大神宮へ公卿の勅使が立てられたと云う京都の動きを挿む。「平家ついたうの御いのりなり」と目的を明示するのは延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本である。諸本、九月二日のこととするのに小野文庫本は日付けがない。

大神宮勅使の後、場面は又筑紫の平家に移り、内裏造出、宇佐詣でとなる。この記事の流れ方は引き続いて覚一本に等しい。しかし、その内容となると、「つくしにはだいらすてにつくり」としてゐることや宇佐での宿所割り等、非当道系本のそれとの一致が目につく。このことに就いては既に高橋氏に「宇佐行幸事は長門本に近く」の指摘がある（勿論、延慶本も劣らない）が、「大ほさつ一しゆの御ゑいそありける」の表現は源平闘諍録との関係も考えさせる。猶、小野文庫本は「ていしやうには四国のつはもの共」と九州の武士のことを記さない。これは、太宰府入りの所に大蔵種直の外は馳せ参じる者がなかったと記されてゐたことを合わせ考えると、寧ろ妥当な処置かと見られる。これも、前後をよく読んで、整合性をもたせると云う編著者の傾向が認められる所である。

宇佐詣での後は平家一門の十三夜の月見、詠歌となる。ここは当道系本の筆致だが、歌の並び方は平松家本・鎌倉本・小城本に一致してゐる（高橋氏は「一方流覚一本に類し」とされるが）。

いよいよ平家追い出しの動きが始まる、それが豊後の国司藤原頼輔

猶、延慶本・長門本の間では微差ながら、

延 宇治木幡 ヲ經テ

長 木幡山を越テ

のように延慶本の表現がより近い。又、小野文庫本には「うはひとりけるうへらく中の」に誤写があると思われる。当道系本と非当道系本で異なる処は入京と共に始まる源氏軍の掠奪を記すか記さないかであり、小野文庫本は非当道系本の内容を採用して、後の法住寺殿合戦の下染めとしたのであろう。又、延慶本・長門本を含めて非当道系本・当道系本共に、行家入京に続けて義仲を始めとする源氏軍の入京を記すのであるが、小野文庫本はこれを省いてゐる。おそらく小野文庫本は法皇還御の処での義仲を始めとする源氏軍の供奉との重複を避けたのであろうと考えられるが、小野文庫本の改編著の背後にはこのような全体を見た上での判断が認められそうである。更に、表現は異なるが、行家軍を「一万よき」とするのは屋代本・小城本・百二十句本・東寺執行本・中院本と云う当道系本であり、小野文庫本はこれらの一本を参考にして「一万よき」としたに違いない。

二十九日義仲・行家が仙洞御所に召されて、平家追討の院宣と宿所を賜つたと云う所も延慶本・長門本に近い。小野文庫本は両本にある頭の弁兼光を介して院宣を伝えたことと、行家に東山、義仲に洛中の警固を命じたことを省き、義仲が院宣に対する返事を述べたことを加えている。義仲が返事したことは南都本に見られる（表現は異なる）ので、南都本を参考にしたのであろうか。

これに続く、法皇の安徳天皇を戻すように平時忠に命じたことも効果なく、遂に公卿僉議で新しい天皇を立てることに決まるまでの所は非当道系本の表現が近いかと思われるが、特にどの本が近いとは言えない距離にある。「ほうわうは御心くるしくおほしめす」と云う表現や、延慶本・長門本にある僉議の具体的内容を欠く点は源平盛衰記

に近い。猶、法皇が三種の神器に言及するのは当道系本の覚一本・竹柏園本・小城本等であり、「くわいせき」と云う表現等も一致するのでこれらの本と関係もあるのであろう。

八月五日、法皇が故高倉上皇の三の宮・四の宮に会见される所から紀伊守範光について「ゆ、しきほうこうの人かなとそおほえし」と感想が記される所までもこの前のところと同じ様な状況にある。しかし、

中納言のないしとて 上臈女房ニテ
上臈女房にて 候はせ給けるか

（注）小野文庫本の右に延慶本の、左に長門本の校異をそれぞれ細字で記した。

のように、延慶本・長門本にしかない表現で、小野文庫本に一致するものが見られるので、高橋氏の指摘のように延慶本あたりを利用してゐることも確かであろう。又、「さうなくあゆみよらせ給て御ひさにまいらせ給ふよとなつかしけに見あけまいらせさせ給ひければ」は源平盛衰記の「さうなくあゆみよらせ給御ひさの上にわたらせまし／＼御なつかしけに龍顔をまもりあけまいらせ給けり」と関係がありそうである。

二十日四の宮が五条の内裏で即位された所から惟喬惟仁両親王の位争いを合わせ叙した所までは高橋氏に「一方流覺一本に近い本文」と云う指摘がある。確かに覚一本、次いで鎌倉本に近い本文だが、しかし、惟喬惟仁が「かれは守文繼跡の器量あり、是は万機輔佐の心操あり」と云った点で優劣付け難かつたという文章を欠いてゐることや、「しんしほうけんないし所ましまさせんそのれいしんむてんわうよりこのかたこれはしめなり」「みかとかくれさせ給ひしかはそも／＼いつれの宮をかくらゐにつけたてまつるへきとせんぎあり」と云った文があることで屋代本に近い面も見られる。又、惟仁を「四宮」としてゐる点とか「まつたいにはかゝる事も有けるとかやと人々申けり」

左中将清經入水事（竹）

六讃岐國屋嶋内裏造營事（屋）

屋嶋内裏事（両）

八しまやかたの事（百 小目）

七鎌倉前右兵衛佐頼朝乍居蒙征夷將軍宣旨事（屋）

ひやうゑのすけ將軍のせんじをかうぶらる、事（中）

頼朝征夷將軍宣旨事（長）

八兼康与木曾合戦スル事（延）

九木曾於京都致狼藉事（鬨）

木曾都ニテ悪行振舞事（延）

木曾義仲（於）洛中狼藉（之）事（屋・平）

（注）番号は小野文庫本の章段番号である。類似の表現例は各章段三つ以内に絞った。例に挙げられた諸本は源平闘諍録→鬨のように一字で示した。

のようになる。非当道系本では延慶本・源平闘諍録・長門本に一致するものが多く、当道系本では屋代本・両足院本が比較的多いようである。

猶、小野文庫本の「十 木曾振舞共可咲事」は配列から見れば法住寺合戦の後、義仲が何に成ろうかと言って結局左馬頭になる所あたりかと考えられるのだが、或いはこれは章段名の補遺であったのではなからうか（これだけがウラに記されている）。もし、これを猫間中納言との対面や牛車での初出仕の章段名とすれば、

木曾京都ニテ頑ナル振舞スル事（延）

木曾義仲於洛中振舞事（屋）

木曾振舞事（南）

と云ったものが類似の表現として挙げられることになる。

二

小野文庫本の巻第八は「寿永二年七月廿五日平家都をおちはてぬ」と云う文で始まる。これは当道系本の表現であるが、調査した限りでは前巻（巻第七）がこの文で纏められてゐて、小野文庫本のようにこれを巻頭とするものはない。

これに続く後白河法皇が鞍馬から横川の寂場坊を経て南谷の円融坊に移る所までも当道系本の表現である。中でも、鞍馬滞在を出発点として描いてゐる点で、屋代本・東寺執行本・中院本に近いと認められる。しかし、小野文庫本は円融坊を守護した勢に武士を加えず、大衆だけを挙げてゐる（屋代本をはじめとして当道系本は武士と大衆とする）。義仲軍は既に比叡山に這入つてゐたと思われるのだが、小野文庫本はなぜかここではその源氏の姿を出そうとしないのである。

法皇が天台山に無事に居られると云う情報が京都に流れた所から、二十八日の源氏に守護されての還御（「めつらしかりし事共なり」まで）というところまでも当道系本の表現である。但し、この前半部情報が流れて廷臣達が円融坊に駆け付ける所は、高橋氏が「一方流に近い本文」と指摘されてゐるように覚一本に最も近い。猶、小野文庫本は「官加階に望をかけ所帯所職を帯する」と云う私欲からと読める表現を省き、「よるこびをなして」と、純粹に無事を祝って駆け付けたとしてゐる。後半部、法皇の還御を記した所は覚一本よりも屋代本・小城本・百二十句本に近そうである。

右に続く「けいしやううんかくおほくぐぶして」の文から辰の刻の行家の入京、そして京での源氏による狼藉へと続く所は非当道系本の表現であり、配列、日付けの上から延慶本・長門本に近い（「こも高橋氏に」行家義仲都入以下四宮即位事に至る文は略長門本（延慶本）に一致して、一方流八坂流本と異なる詞章である」と云う指摘がある）。

岡山大学蔵小野文庫本『平家物語』卷第八

に就いて

橋口晋作

小野文庫本『平家物語』(以下、小野文庫本と略称する)卷第八に就いて、影印本の「解説」^(注一)を執筆された森岡常夫氏は「十二卷本としては特殊な部分」「十二卷本系統の他の諸本にみない事項」の存在を指摘された。この「解説」^(注二)を承けて高橋貞一氏は「岡山大学蔵小野文庫本平家物語について」と云う御考察を示され、この巻を「平家物語のすべての傳本中での特異な傳本」、「一方流本を主本文として長門本などを以て補訂せられたもの」との見方を示された。筆者は拙稿「南都本『平家物語』第九、及び、延慶本『平家物語』第四をめぐって」^(注三)で、この巻に言及し、「南都本第九」に他本以上に一致する表現が多く、南都本周辺の本として見直すべきでないか」と云う考えを示した。しかし、前稿は南都本との関係だけについての言及であつたし、調査も非当道系本に限られてゐたので、当道系本の代表的なものを加えて、高橋氏の御考察をもっと細かに詰めてみようと思う。猶、本稿で筆者が調査に使つた諸本は、源平闘諍録(影印)・四郎合戦状本(同)・延慶本(同)・長門本(同、伊藤家蔵)・源平盛衰記(同、蓬左文庫)・南都本(同)・屋代本(同)・平松家本(翻刻、^{平松家本}平家物語の研究)・竹柏園本(影印)・鎌倉本(同)・百二十句本(同、国会図書館蔵)・小城本(影印)・覚一本(翻刻・日本古典文學大系)・東寺執行本(翻刻・うもれ木文庫)・中院本(翻刻・未刊国文資料)・両足院本(影印)・八坂本(同)と云つたものである。

岡山大学蔵小野文庫本『平家物語』卷第八に就いて(橋口)

小野文庫本には次の様な目録が付いてゐる。

一 義仲入洛事

二 惟喬惟仁親王位諍事

三 平家一門宇佐宮詣事

四 豊後國司平家九州へ追落事

五 左中将清經海底沈給事

六 讃岐國八嶋御所立事

七 頼朝宣旨頂戴事

八 妹尾木曾弓引事

九 木曾於京都任雅意事

十 木曾振舞共可咲事

高橋氏に「目録も他本と異なるものがある」と云う指摘があるが、^(注四)類

似の表現を挙げてみると、

一 法皇都還御事付木曾入洛事(東)

行家義仲(自宇治瀬田)入洛事(關・南・両)

義仲行家京入(盛)

二 維高維仁親王位諍(之)事(關・鎌・小)

惟高惟仁(ノ)位諍(事)(延・竹・百 小目)

維高惟仁位論(盛)

三 平家人々宇佐宮へ参給事(延)

平家宇佐宮詣事(両)

奉始主上平家(豊前國)宇佐宮参詣事(關・長・屋)

四 平家九國中於可追出之由被仰下事(延)

五 (小松)左中将清經入海(らる、事)(長・中)

左中将清經投身(給)事(延・東・両)